

【研究論文】 中学校道徳教科書における「礼儀」の扱われ方

## How “Manners” Are Treated in the Textbooks of Junior High School

### 【要旨】

In this study, we revealed how materials on the moral value of etiquette are treated in textbooks for morality classes. As a result, we have found that while the degree of adoption and attention of materials about etiquette, teaching materials about greetings, and materials that make one think about the structure and essence of etiquette have largely decreased compared to when morality was not a regular subject, the degree of adoption of actions has largely increased. Consequently, this study shows the importance of materials that make one think about the essence of etiquette and how the act of manners can be a key to expanding a student's learning in various ways, and points to doing lessons that make students discuss and think about the meaning and reason of manners by actively adopting traditional manners on top of that.

キーワード：礼儀 教科書 挨拶

keywords : Manners , textbook , greeting

### 1. はじめに

礼儀の学びは日本社会の各方面において希求されてきた重要な道徳的価値といえるが、義務教育を終えて社会に出る者が最後に学ぶ機関である中学校においても、教科の授業における始業時・終業時の礼をはじめとして、生徒会活動などによる「挨拶運動」や、校外学習における公衆マナーなど、礼儀に関するさまざまな学習形態が見られる。そのような学びは、その後の社会生活の重要な基盤となると考えられる。学校教育における礼儀は、その学びの要となる「特別の教科 道徳」（以下「道徳科」）において道徳的価値「礼儀」として扱われ、検定教科書においても礼儀に関する資料が全学年の教科書において掲載されている。

平成 29 年告示の学習指導要領では、道徳科における指導として「考え、議論する道徳」への転換が示され、質の高い多様な指導方法として「読み物教材の登場人物への自我関与が中心の学習」に加えて「問題解決的な学習」と「道徳的行為に関する体験的な学習」が示された。礼儀については、その中でも「道徳的行為に関する体験的な学習」が、特に関係の深い指導方法として注目される。

「体験的な学習」について、「中学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編」には、

「道徳的行為に関する体験的な学習等を取り入れる工夫」として、「具体的な道徳的行為の場면을想起させ追体験させて、実際に行為することの難しさとその理由を考えさせ」とある。小学校の学習指導要領解説ではこの部分を「実際に挨拶や丁寧な言葉遣いなど具体的な道徳的行為をして、礼儀のよさや作法の難しさなどを考える。」としており、小学校で「作法」と表現したものを「実際に行為すること」と広げているが、本義は同じものと考えられる。ここから、礼儀における実際の道徳的行為として作法を取り上げることは適切であり、妥当性があるといえる。このことについて平成 29 年告示の中学校学習指導要領解説においては「礼儀の基本は、相手の人格を認め、相手に対して尊敬や感謝などの気持ちを具体的に示すことであり、心と形が一体となって初めてその価値が認められると考えられる。敬愛の気持ちを伝えるために、相互に認められる形が必要である。」と内容項目の概要に示されるとともに、「挨拶の意義などを主体的に考え理解し、例えば、時・場所・場面（TPO）に応じて、自ら挨拶をしてからお辞儀をするなど、適切な言葉や行動ができる自律した態度へ変わっていくこと」が礼儀の指導の要点として求められている。

礼儀の領域における T P O に応じた適切な言動は、多くの場合は作法の形で他者に向けて発信されるものであるが、教科化以前はそれらが道徳副読本の資料として取り上げられることが少なく、礼儀の資料のほとんどが「挨拶」によって占められていた<sup>(1)</sup>。ここから、教科化後の道徳における礼儀の指導は、道徳的行為としての作法（動作）をいっそう扱うことによって、「考え、議論する道徳」としての転換をより効果的に果たすことが考えられる。

このような体験的な学習に関する工夫は、押谷の指摘するように従来の道徳の時間において具体的な体験を想起できるように工夫することが平成初期にはすでに提唱されていた<sup>(2)</sup>。しかし現実的にはそのような理念の理解が不十分であり、効果的な指導方法が共有されていない状況が見られ、教科化に至っている。

「作法」は、児童生徒が生きる現実世界において、礼儀という道徳的価値が生きて働いた結果として他に向けて表出された「行為」に他ならない。道徳的価値を多面的・多角的に考えるためのアプローチの一つとして、社会的な視点から行為を検討する手法が考えられるが、礼儀という道徳的価値を考えるアプローチとして「作法」という行為を用いることはまさにそれであり、道徳の教科化に伴って特に強調されたポイントとも言えるだろう。

では、教科化した道徳科で使用される検定教科書において、「礼儀」はどのように扱われているのであろうか。いまだに挨拶ばかりを扱ってはいないだろうか。礼儀にかかわる「動作」が「作法」という「道徳的行為」としてどのようにどれだけ扱われることになったのだろうか。従来の道徳副読本にみられた「挨拶のよさ」ばかりに終始する状況から脱却して、どのように新しい指導内容と指導方法を採用しているのか。

道徳の教科書における資料の内容に関する研究は、平田による小学校道徳科教科書における指導内容に関する取扱い数についての総合的な研究<sup>(3)</sup>をはじめ、渡辺による動物愛護の視点からの研究<sup>(4)</sup>、鈴木による「我が国や郷土の文化」に関する研究<sup>(5)</sup>、古川による愛国心に関する研究<sup>(6)</sup>などがある。しかし、これまでに中学校の道徳科教科書の資料における礼儀の内容に注目し、それを対象とした研究はなかった。

以上から、本研究では中学校の道徳科教科書における道徳的価値「礼儀」の内容における「作法」に注目し、その取り上げられ方と、作法を用いた資料の扱われ方を明らかにする。併せて、現代の学校教育における「礼儀」の内容とその在り方についての検討を行うことで、道徳教育に於ける礼儀の指導に関する新たな知見を提供する。

## 2. 方法

### 2-1 手続き

平成 31 年に日本の中学校で用いられる全ての道徳科の教科書について、出版社が「礼儀」の題材に区分した資料を全て抽出し、それらにどのような内容が含まれているのかを分類し分析した。これは教科書の巻末に「学習指導要領との関連」「資料内容一覧」などの名称で掲載される表に「B-(7) 礼儀」として表示されたものである。なお、分析の手掛かりとして、全学年に共通して6種類の分類項目を用いた（挨拶、言葉、動作、礼儀の大切さ：以下「大切さ」、真心、時と場、形にこめられた尊重の気持：以下「形と尊重」）。これらは学習指導要領解説において示される文言から、礼儀を構成する要素として特に重要と思われる語句を抽出し採用したものである。資料に含まれる礼儀の内容の判定には、各出版社が作成して学校教員に頒布する学習指導案および年間指導計画等の「ねらい」「指導内容」を用いた。

### 2-2 分析対象とした教科書

平成 27 年に改定された学習指導要領に準拠して作成され、平成 30 年度に使用されていた道徳科の教科書すべてを分析対象とした。その数は、中学 1 年～3 年（計 3 冊）× 8 種（8 社）（学研、学校図書、教育出版、廣済堂あかつき、東京書籍、日本教科書、日本文教、光村図書）、合計 24 冊であった。

## 3. 結果と考察

### 3-1 資料数における「礼儀」の占める割合

表1「礼儀」資料数

	1年	2年	3年	計
学研	1	1	1	3
学校図書	1	1	1	3
教育出版	1	1	1	3
廣済堂あかつき	1	1	1	3
東京書籍	1	1	1	3
日本教科書	1	1	1	3
日本文教	1	1	1	3
光村図書	1	1	1	3
計	8	8	8	24

表2「礼儀」の占める割合

	総資料数	礼儀資料数	割合
1年生	280	8	2.9%
2年生	280	8	2.9%
3年生	280	8	2.9%

表 1 に 8 社 24 冊の中学校副読本において礼儀を扱っている資料数を示した。資料総数は 24 であった。なお、1 冊の教科書に掲載されている資料数は全出版社の全学年の教科書において 1 資料であり、複数の資料を掲載した出版社は見られなかった。総資料数は各学年が 8 であった。このように「礼儀」の資料は出版社や学年による掲載数の差異は見られなかった。

総資料数に占める礼儀資料の割合を確認したところ、全ての学年で学年資料数の

2.9%を占めている。ちなみに「礼儀」「規則の尊重」などの学習指導要領に示される道徳科の学習内容項目数は全学年を通して 20 であるため、1項目あたりの占める割合は 5.0%となる。上記のように実際の教科書では「礼儀」は全学年において 2.9%に過ぎず、1項目あたりの理論値と比較した場合にはその占める割合は低い。この数値から見た「礼儀」は、すべての資料のなかで特には重視されているわけではない傾向が伺える。

### 3-2 教科書（年間指導計画）における「礼儀」資料の配置

	1年	2年	3年
4月	3	2	3
5月	2	2	1
6月	2		
7月		1	
8月		1	1
9月		1	2
10月			
11月	1		1
12月			
1月			
2月		1	
3月			

すべての道徳の教科書においては、出版社によって年間 35 種類の資料が巻頭から番号を振られて配置されていた。各出版社が例示する年間指導計画においては4月の第1回授業が1番の資料とされ、3月の最終回の授業を35番として順に授業が進められるように構成されている。これらの配置における「礼儀」の計画用上の実施月を集計したのが表3である。

表3では資料配置が年度初めに集中する現象が見られる。1年の資料ほとんどが4月から6月に配置され、2年と3年では半数の4本が集中的に4・5月に配置される。そして残りは9月を中心として配置されるという2群に分かれる傾向が伺えた。

なお、4月の資料8本のうち、4本が挨拶（1年3、2年1）であり、5月の資料5本のうち2本が挨拶（1年2）であった。つまり4・5月の13資料のうち、およそ半数となる6資料が挨拶を扱っており、出版社8社のうち5社が1年生の4・5月で挨拶を取り上げている状況が伺える。

「挨拶」という題材については、平成27年に改訂された小学校学習指導要領第3章特別の教科 道徳第2内容B「主として他の人とのかかわりに関すること」で、**〔第1学年及び第2学年〕気持ちのよい挨拶、言葉遣い、動作などに心掛けて、明るく接すること。**

とあり、「礼儀」の内容として明確に位置づけられているため、1年と2年の教科書では必ず関係する資料が示されることとなっている。その他の学年と中学校については、

**〔第3学年及び第4学年〕礼儀の大切さを知り、だれに対しても真心をもって接すること。**

**〔第5学年及び第6学年〕時と場をわきまえて、礼儀正しく真心をもって接すること。**

**〔中学校〕礼儀の大切さを知り、誰に対しても真心をもって接すること**

とあるように、とりたてて挨拶のみを取り上げるべき文言や表現はみられない。

しかしながら、中学校学習指導要領解説には、「(2) 指導の要点」として「指導に当たっては、まず、教えられ無意識に習慣として実践してきた受け身の姿勢から、挨拶の意義などを主体的に考え理解し、例えば、時・場所・場面（TPO）に応じて、自ら挨拶をしてからお辞儀をするなど、適切な言葉や行動ができる自律した態度へ変わっていくことが求められる。」

というように、「挨拶の意義などを」「自ら挨拶をしてからお辞儀をするなど」の例

示文の中で「挨拶」が用いられている。このためであろうか。後述のように、全 24 資料のうち、半数を超える 13 資料が何らかの形で挨拶を扱う内容であった。

以上から、中学校道徳科教科書における「礼儀」に関する資料としては、全 24 資料の半数を超える 13 資料が学年発足期の 4・5 月に配置され、そのうち半数を超える 6 資料が挨拶に関する内容であることが確認された。

### 3-3 総資料数にみる「挨拶」

前項では 4・5 月の挨拶に絞って資料の内容を検討したが、それでは中学校道徳科教科書の総資料数における「挨拶」の占める割合はどのような状況にあるのか。ここでは、6 種類の分類項目（挨拶、言葉、動作、大切さ、真心、時と場、形と尊重）を手掛りとして確認する。なお、あわせてそれらの資料を用いての「体験的活動」を想定しているものについても確認する。「体験的活動」の抽出は、出版社によってそれが明示されているものを取り上げた。

表 4 道徳資料「礼儀」内容採用資料数

学年	資料数	挨拶	言葉	動作	大切さ	真心	時と場	形と尊重	体験的活動
1年	8	6	7	3	6	5	2	1	1
2年	8	3	3	2	7	4	4	1	0
3年	8	4	4	6	6	2	7	0	3
計	24	13	14	11	19	11	13	2	4

学習指導要領における礼儀内容項目の該当学年については、「礼儀の大切さを知り、誰に対しても真心をもって接すること」と示されており、当然ながらそれに関する「大切さ」を題材に

表 5 各学年資料数に対する礼儀内容の採用率（%）含む資料数が 19 と最も多く、

学年(資料数)	挨拶	言葉	動作	大切さ	真心	時と場	形と尊重	体験的活動
1年(8)	75	75	38	75	63	25	13	13
2年(8)	38	38	25	88	50	50	13	0
3年(8)	50	50	75	75	25	88	0	38
計	54	58	46	79	46	54	9	17

全資料中の 8 割を占めている。なお残りの 5 資料においても、他の手掛かりを用いて礼儀の大切さを考えさせるように資料が示されている。

「大切さ」に続いて採用率が高いのが「言葉」である。

ついで「挨拶」と「時と場」が同率であった。「指導の要点」には「時と場に応じて主体的に適切な言動が行われることが求められている」とあるように「時と場」と「言葉」が重視されているのは当然といえるが、「言動」のうち「動」が 11 資料と、46% の採用率にとどまっている。

このように、学習指導要領の文言に現れる「動作」の内容がさほど多くなく、それよりも「解説」にのみ示され、しかもそれは単なる例示にすぎない「挨拶」がより多く採用されている点が特徴的である。ではこの「動作」はどのような内容が示されているのであろうか。

### 3-4 「動作」の内容

中学校学習指導要領解説特別の教科 道徳編では、礼儀について

『礼儀』は、他者に対するものであり、身に付けておくべき外に表す形であると考えられる。具体的には言葉遣い、態度や動作として表現される。」

「敬愛の気持ちを伝えるために、相互に認められる形が必要である。」

と説かれる。この「相互に認められる形」としての動作は、小学校学習指導要領においては「作法」として示されている。

ではこの「動作」、あるいは「形」、またその様式である「作法」について、教科書にはどのような内容が示されているのだろうか。本稿ではこれらの概念を学習指導要領に示される「動作」の語に集約して分析を進める。

表4によると、24の資料のうち、文章や挿絵によって礼儀に関する動作が示されるものは11ある。その内容の内訳は、表6のようなものとなった。

学年	資料数	動作	うち挨拶関連	挨拶以外	挨拶を除いた「礼儀」の動作内訳
1年	8	3	2	1	脱帽してお辞儀(2)、知っている作法の想起、
2年	8	2	0	2	お通夜での作法、茶道の作法
3年	8	6	1	5	握手の作法、入室の作法(2)、レストランでの振舞い、フォーク並び
計	24	11	3	8	

※挨拶との重複3

内容としては、お辞儀、握手といった【挨拶の作法】(2資料)、職員室などの【入室の作法】(2)、【お通夜の作法】、【レストランでの作法】、トイレにおけるフォーク並びのような【公共の場の作法】、そして知っている作法の想起と共有を通じての【作法全般】が採用されている。単なる挨拶にとどまることなく、社会生活における「生きて働く」礼儀が想定されているとも考えられよう。

この11資料を出版社別に分類すると、学研1、学校図書1、教育出版2、廣済堂あかつき2、東京書籍1、日本教科書3、日本文教0、光村図書1であった。つまり出版社によっては3年間で1回も礼儀の動作の学びに繋がる資料に触れる機会がないことになる。最大でも3回である。「身に付けておくべき外に表す形」の学びとしては、十分といえるものとは考え難い。

	学研	学校図書	教育出版	廣済堂あかつき	東京書籍	日本教科書	日本文教	光村図書	計
動作資料数									
あいさつを含む		1	1			2			4
あいさつ以外含む	1		1	2	1	1		1	7

中学校学習指導要領解説道徳編においては、

「日常生活において、時と場に応じた適切な言動を体験的に学習するとともに、形の根底に流れる礼儀の意義を深く理解できるようにすることが大切である。」

と示されている。

しかしながらその手掛りとなる「時と場に応じた適切な言動」、つまり場面に応じた作法や「形の根底に流れる礼儀の意義」を示す事例が、出版社ごとの道徳科教科書においては6年間でわずか1～2例と、ごく少ない種類しか示されていないことがわか

る（表7）。「あいさつ」関係のものを除くと0本から2本という少なさである。このように礼儀の学びにおいて重要な要素である動作（作法）の掲載数は極端に少ない。

### 3-5 「挨拶」を題材とする資料への偏向

動作が認められる11の資料のうち、挨拶に関するものが3資料と、約3割を占めており、動作の内容としてもっとも占有率が高い。それでは各出版社において、動作だけでなく、挨拶全般に関する資料はどのように配置されているのだろうか。

	1年	2年	3年	計
学研	1			1
学校図書	1		1	2
教育出版	1		1	2
廣済堂あかつき			1	1
東京書籍	1	1	1	3
日本教科書	1			1
日本文教	1	1		2
光村図書		1		1
計	6	3	4	13

全24資料中、挨拶を題材とするものが13本を占めており、5割強が挨拶に関する内容であることがわかる。

また、1年では中学校のスタート学年ということか、8社中6社が挨拶を扱っており、他の2社も3年間のどこかの学年で挨拶を扱っていることがわかる。

確かに挨拶は人と人との関係をつなぐ重要な営みであり、その作法も基本的な生活習慣と相まってその習得が必須とされるものであろう。その重要性はゆるぎないものといえる。しかしながら、礼儀といえば挨拶、という認識がもし存在するならば、それは生徒の学習において、礼儀そのものに関する認識の枠を、教科書を用いた教育によって矮小化するおそれがある。生きて働く道徳的資質・能力の育成のためには、挨拶だけでなく、日常のさまざまな場面に現れる多種多様な作法を用いることが望ましいだろう。そのためには「挨拶」に偏ることなく、今回の「動作」に現れているような、身近な暮らしや社会生活に即した、さまざまな作法が登場する資料が扱われることが望まれる。

## 4. 教科化以前の副読本との比較

教科化以前の道徳の副読本と、教科化後の教科書とでは礼儀に関する資料の内容に相違はあるのだろうか。柴崎による道徳副読本の研究<sup>(7)</sup>の結果との比較を行う。副読本は、平成20年に改定された学習指導要領に準拠して作成され、平成23年に入手したもののうち、自治体独自作成のものを除き、入手・内容確認が可能なもの8種を分析対象としている。

### (1) 総資料数

総資料数については、教科化以前の副読本では8社31本だった礼儀の資料が、教科化後の教科書では8社21本と、3割以上の削減となっている。

総資料数に占める礼儀資料の割合は、副読本が1年3.6%、2年3.9%、3年3.6%

あるのに対して、教科書では1年～3年で2.9%となっており、いずれの学年においても教科化後は採用率が減少している。

#### (2) 資料の配置月

資料の配置月に関しては年度初めに集中する傾向に双方があり、大きな変化はない。ただし、教科化後は3年間で7本あった2本目の資料の配置が皆無となっている点が大きな相違となっている。

#### (3) 資料の内容

資料の内容の採用率について、副読本では挨拶90%、言葉71%、動作13%、大切さ74%、真心43%、時と場32%、形と尊重35%であった。これに対して教科書では挨拶54%、言葉58%、動作46%、大切さ79%、真心46%、時と場54%、形と尊重9%となっている。

教科化後は挨拶と言葉、そして形と尊重の採用率が下がり、動作、大切さ、真心、時と場が上がっている。

#### (4) 資料における動作の内容

副読本においては江戸しぐさ、列に並ぶ作法（フォーク並び）、配膳の作法、見送りの作法、電話の作法が示されていた。教科書では脱帽してお辞儀、お通夜での作法、茶道の作法、握手の作法、入室の作法、レストランでの振舞い、フォーク並びといったように、教科化以前に比べて社会的な作法や日本文化的な作法、異文化の作法など、その幅が広がっていることが伺える。

### 5. 総合的考察

礼儀に関する資料の採用率が大幅減となり、その注目度が以前と比べて低下しているように見受けられる。しかし重要性が低下したというよりは、「動作」としての礼儀をどのように資料化すべきか、教科書作成者の間における逡巡が、このような結果を招いているとも考えることが可能であろう。

そこでまず注目すべきは挨拶の採用率が大幅に下がっている点である。教科化以前の資料の90%を占め、あたかも「挨拶病」のように挨拶ばかりを繰り返し提示し続けていた副読本の礼儀資料だったが、教科化後は54%に減じている。挨拶は大事だ、挨拶は気持ちがよい、と指摘するだけでなく、教科化後にいざ挨拶を行為として扱おうとする必要性が生じたとき、その「作法」を示すことになんらかの戸惑いが生じているのではないだろうか。

これに関してもう一つの注目すべき現象は、動作の採用率が46%に大幅に向上した点である。これは指導要領改訂の趣旨に沿った結果として、動作を手掛かりとして礼儀を考えさせる資料が増加したことを意味している。しかし、たとえば挨拶を動作の面から考えさせようとした場合、お辞儀などの作法を扱う必要が生じる。この「お辞儀の作法」を示そうとした場合には、同時に形による「教え込み」を忌避しようとする意識が生じることになる。ここにおいて、「作法の提示」と「教え込み」を両立させるための葛藤が生じるため、漠然とした動作（脱帽してお辞儀、握手など）を示すに



とどめざるを得ないことになる。つまりこれまで通り気軽に「礼儀と言えば挨拶」と扱うわけにはいかなくなっただのであろう。しかしこれについては、たとえば握手の作法ではなぜ手を強く握ってしっかり振る作法があるのかなどを取り上げた場合、それが利き手の脇の下に武器を隠し持っていないかを相互に確認し合い安心し合うため仕草だったという説を紹介し、そこから日本のお辞儀にはどのような意味があるのかを考えさせ、礼儀の本質に迫る議論を展開させるやり方が考えられよう。そこからはたとえば相撲の土俵入りの際の手を広げる作法が、同様に武器を隠し持っていないことを示す表現であったという説を重ねて紹介するなどの工夫により、国際理解や伝統と文化の尊長といった他の道徳的価値の学びにつなげることも可能であろう。このように作法という動作は、様々な形で生徒の学びを広げる手掛かりとなるのである。

ところが、形と尊重においては教科化以前の 35%からわずか 9%に大幅に減少している。

これは、礼儀が形となった動作・作法について、それを意味あるものとして重視し、考えさせようとする資料が減ってしまったことを意味している。礼儀の動作を資料として示してはいるが、その動作がどのように他への敬意を伝えようとしているのか、その構造と本質を考えさせるような資料が減少してしまったことになる。

これは、いざ「形」「動作」「行為」を扱おうとしたとき、それらを資料として示すまではできるのだが、それを生徒に考えさせ、議論させるための前提となる、「形や動作や行為が表そうとする敬意」が、なぜそのような形で表出されるのか、という理解が希薄なためではないだろうか。

中学校学習指導要領解説には、「我が国には伝統的な礼儀作法があるように」と示されているが、例えば日本の礼儀作法の源流とされる伝統的な礼儀作法の体系である小笠原流礼法では、敬意を形に表した様々な作法が伝承されており、礼儀に関する道徳の資料の源泉として有用であろう。

「心も形も大事」だけではなく、「なぜそのような形が敬意を伝えることになるのか」という本質に向けて考えさせるような資料こそ、礼儀の学びをより深めることが可能となるだろう。この意味で、小笠原流礼法などに見られる伝統的な作法を積極的に採用し、その意味と理由を考えさせ、議論させる、そのための道徳の資料が教科書にさらに採用されることが望まれるのである。

以上を鑑み、今後はこれらの結果を踏まえた道徳「礼儀」資料の内容の適正化に向けた更なる研究をすすめたい。

## 引用・参考文献

(1) 柴崎直人「中学校道徳副読本における『礼儀』の扱われ方」,学習院大学教育学・教育実践論叢,2018,pp.21-30

(2) 押谷由夫 「道徳授業の工夫」 初等教育資料 580号,1992, pp.60-67

(3) 平田繁「小学校道徳科教科書における指導内容取扱い数」中村学園大学発達支援センター研究紀要 (10), , 2019,pp.93-101

(4) 渡辺典子「『特別の教科 道徳』における小学生用教科書：動物愛護の視点からの検討」,人間研究 (55),日本女子大学教育学科の会,2019,pp.65-77

(5) 鈴木慎一郎「小学校道徳教科書における『我が国や郷土の文化』：日本の民謡に着目して」,『地域学論集』,鳥取大学地域学部紀要 15(2),2019,pp.83-94

(6) 古川雄嗣「小学校道徳教科書における「愛国心」の取り扱いについて：教育出版と光文書院を事例として」,北海道教育大学紀要. 教育科学編 68(2),2018,pp.47-57

(7) 柴崎直人,前掲書